「お見通し」発言とその翻訳［資料集］

著者	西嶋 義憲
雑誌名	論文集 ： 金沢大学経済学部社会言語学演習
巻	6
ページ	33-52
発行年	2011-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2297/27146

資料集

「お見通し」発言とその翻訳

西嶋 義憲[1]

<概 要>

カフカ作品における登場人物間の会話には「お見通し」発言が認められることがある。「お見通し」発言とは、目の前にいる対話相手の思考内容を発話者が面と向かって断定的に表現する発話のことである。カフカは作品の中で、このような発話をレトリックとして登場人物に言わせることにより、登場人物間の力関係の変化を、また場合によっては相手への共感を、明示しようとしているようである。しかしながら、対話相手の思考内容を当の相手に向かって断言するという発話はフィクションにおいても日常的ではない。相手の思考内容に言及する場合は、問いかけや確認という形式を用いるのが普通であろう。では、このようなカフカ作品に見られる固有のレトリックは、翻訳ではどのように扱われているのであろうか。本稿は、「お見通し」発言という日常的にはほとんど使用されない発話が日本語や英語にどのように翻訳されているのかを調査するための資料の一部を提供し、オリジナルと翻訳を対比することで、レトリックの翻訳可能性を探る基礎を提示するものである。

<キーワード>

「お見通し」発言、翻訳、レトリック、モダリティ

[1] E-mail: yotchan@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

＜目 次＞

1. 「お見通し」行為と durchschauen

2. 「お見通し」発言の翻訳例
   2.1. 『判決』
   2.2. 『流刑地にて』
   2.3. 『失踪者（アメリカ）』
   2.4. 『訴訟（審判）』
   2.5. 『城』

文献

1. 「お見通し」行為と durchschauen

カフカの初期作品『判決（*Das Urteil*）に「お見通し」行為について言及してある箇所がある。息子に対する父親の発言である。当該部分を含む原文を引用し、ついでその日本語訳を挙げる。下線部が「お見通し」行為を表している：

„... Aber den Vater muß glücklicherweise niemand lehren, den Sohn zu durchschauen. Wie du jetzt geglaubst hast, du hättest ihn untergekriegt, so untergekriegt, daß du dich mit deinem Hintern auf ihn setzen kannst und er rührt sich nicht, da hat sich mein Herr Sohn zum Heiraten entschlossen!“
(*Drucke zu Lebzeiten*, S. 56)

「……しかし、幸いなことに、父親は息子の心を見抜くことぐらい、誰にも教えてもらう必要がないのだ。親父をやっつけてやった、ぐうの音も出ないほどやっつけてやったから、親父のやつ、尻をのっけてすわってやってもぴくりとも動けるものじゃない、そう思ったんだろう、そこでいよいよわが息子殿は結婚の決意をかためたというわけだ！」（円子修平訳『判決』、42）

対話相手の心を見抜く行為をドイツ語 durchschauen で表現している。そして、その行為を具現化するのが「お見通し」発言（durchschauende Äußerung）であると考えられる（西嶋, 2011）。お見通し発言は、つぎの 5 作品で見つかっている：

『判決』（*Das Urteil*）
『流刑地にて』（*In der Strafkolonie*）
『失踪者（アメリカ）』（*Der Verschollene*）
『訴訟（審判）』（*Der Proceß*）
『城』（*Das Schloß*）

本稿では、それぞれの作品に現われた「お見通し」発言を 1 作品につき 1 例取り出し、その翻訳例を複数挙げる。入手できた翻訳は作品ごとに数が異なる。

2. 「お見通し」発言の翻訳例

2.1. 『判決』(*Das Urteil*)

2.1.1. 原文

„Bleib, wo du bist, ich brauche dich nicht! Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen und hältst dich bloß zurück, weil du so willst. Daß du dich nicht irrst! Ich bin noch immer der viel Stärkere. Allein hätte ich vielleicht zurückweichen müssen, aber so hat mir die Mutter ihre Kraft abgegeben, mit deinem Freund habe ich mich herrlich verbunden, deine Kundschaft habe ich hier in der Tasche!“ (*Drucke zu Lebzeiten*, S. 58-59) 下線部が「お見通し」発言と見なされる箇所。以下、同様。

2.1.2. 英語訳

“Stay where you are, I don’t need you! You think you have strength enough to come over here and that you’re only hanging back of your own accord. Don’t be too sure! I am still much the stronger of us two. All by myself I might have had to give way, but your mother has given me so much of her strength that I’ve established a fine connection with your friend and I have your customers here in my pocket!)”
(*The Judgment*, p. 86)

2.1.3. 日本語訳

①
「知らん顔をして、そこにいるがよい。わたしはもうおまえの手は借らんのだ。おまえには手を貸しにくる力があるだろう。しかし、おまえはそこに離れて、身うごきもしない。じつとおまえはそうしていたいのだから。おまえの考えはまちがつてはいないかね。まだまだ、わたしはおまえなんぞに簡単にまけるものか。だが、多分わたしからゆずるのが本当かもしれん。お母さんはいつもそんな風にわたしに力をあたえてくれたものだ。おまえの友達とは、ちやんと連絡がついている。この長衣のポケットに、いまもわたしはおまえの情報を持つているがね。」(旧漢字を新漢字に変更)
(大山定一訳『死刑判決』、旧新潮社版『カフカ全集Ⅲ』、1953、p. 51)

②
「そのままそこにいるがいい。わしはお前なんかいらないさ！ お前に

はまだここまでやってくる力があると、お前は思っているんだ。それだのにお前はよってもこない。そうしたいと思うからだ。思いちがいしないでくれよ！ わしはまだまだお前よりずっと強いんだぞ。だが、おそらくおれのほうがお前に譲歩すべきだったのかもしれない。ところがお母さんが自分の力をわしに与えてくれたのだ。お前の友だちとおれは心から結ばれているし、お前の顧客（とくい）の名前はこのポケットのなかに入っているんだぞ！」
（原田義人訳『判決』、筑摩書房版世界文学大系『カフカ』、1960、414-415）

③
「そのままそこにいるがいい、おまえの助けなど要りはせん！　おまえはまだ自分に、ここまでくる力があると思いながら、ただそこにすっこんでおる。おまえがそうしていたいからなのだ。思いちがいはしてくれるなよ！　まだまだわしのほうが、おまえよりはずっと強いからな。一人だったら逃げなくちゃならんところだろうが、お母さんが自分の力を、このわしにあたえてくれたし、おまえの友だちとはりっぱに結ばれ、おまえのお得意たちは、このポケットのなかにはいっているのだ！」
（辻訳『判決』、『世界の文学 39　カフカ』、中央公論社、1966、484）

④
「そのままじっとしていろ、わしはおまえの手なんか借りる必要はないんだ！ おまえは内心こう考えている、まだここまで寄ってくる力はあるんだが、近寄りたくないからやめておいただけだと。思いちがいもいい加減にせい！ わしの方が今でもやっぱりおまえよりよっぽど力持ちなんじゃ。ひとりならおそらく力敗けもしたろうが、このとおりおかあさんが力を貸してくれたし、おまえの友人とはわしはみごとにタイアップして来たんだ。おまえの情報はここのポケットにちゃんとはいっているのだ！」
（高安国世訳『判決』、講談社文庫版『変身・判決・断食芸人ほか二編』、1971、p. 104）

⑤
「そのままそこに突っ立っていろ。お前の助けなど必要ない。お前はここに来る力がまだあると思っているのだろう。それなのにお前は遠ざかっている。そうしていたいからなあ。だが、思い違いなどするなよ。わしは依然として力がありあまっているんだ。もしかすると、わしひとり

なら、わしのほうから譲歩（じょうほ）すべきであったのかもしれんが、お母さんがわしに力を与えてくれていたのだ。お前の友だちともりっぱに結ばれているし、お前の情報をこのポケットに持っているしなあ」
（川崎芳隆・浦山光之訳『判決』、旺文社文庫版『変身　他四編』、旺文社、1973、14）

⑥
「そこにじっとしているがいい、わしはおまえなど要らない！ おまえは、自分にはここへ来る力がまだある、自制しているのは自分がそう望んでいるからだ、と思っている。思い違いはしないがいい。いまだってわしのほうがはるかに強いのだ。一人ならばわしは引っ込んでいなければならなかったかもしれん、だが、お母さんがわしに力をかしてくれたのだ、おまえの友達ともわしはかたく同盟を結んでいる、このポケットには彼から来たお前の情報がはいっているのだぞ！」
（円子修平訳『判決』、新潮社版『カフカ全集　1』、1980、p. 43-44）

⑦
――お前のおるところにおるがいい、わしにはお前はいらん！ お前はまだ、こっちへやってくる力があると思っておる、来たくないから控えているんだ、とな。思いちがいでなければいいがね！ わしは相変らずお前よりずっとずっと強いんだ。しかし、わしはたぶん、隠退しておるべきだったろう、だがお母さんがわしに彼女の力を与えたのだ、わしはお前の友人と見事に団結したぞ、お前の手紙はちゃんとこのポケットに入っておる。
（長谷川四郎訳『判決』、福武文庫版『カフカ傑作短篇集』、1988、p. 21）

⑧
「そのままそこにいるがいいさ。おまえなんかを必要としないからな！ おまえはまだここまでやってくる力があると思っている。それでいておまえはそうしたいと思うから、引っこんだままでおる。思いちがいをするなよ！ わしはまだどうしてどうしておまえよりずっと強いんだぞ。だがもしかするとわしのほうがおまえに譲歩すべきだったのかもしれん。しかしお母さんが力をわしにゆずり渡してくれたのだ。おまえの友だちとわしはすばらしく結ばれているし、おまえのお顧客（とくい）たちはこのポケットの中に入れて持っているんだぞ！」（柏原兵三訳『判決』、『集英社ギャラリー［世界の文学］12 ドイツⅢ・中欧・東欧・イ

タリア』、集英社、1989、171-172）

⑨
「そこにいろ。いるがいい。おまえなど用なしだ！ 近づく力はあるんだが、わざと近づかないだけだと思っているな。そうだろう。とんでもない！ わしはいぜんとして、おまえなどよりはるかに強い。わしひとりではくじけたかもしれんが、母さんが力をかしてくれた。おまえの友人と固く手を結んでいたのだ。おまえに関することは全部、このポケットに収まっている！」
（池内紀訳『判決』、白水社版『カフカ小説全集④ 変身ほか』、2001、p. 50）

⑩
「そこにいろ。おまえなんかに用はない。手をさしのべる力はあるけれど、そんな気がないから、さしのべないだけだなどと思っているのか。だが勘違いするな。あいかわらず私のほうがずっと強いんだ。私ひとりだけだったら尻込みするしかなかっただろう。だがな、母さんが力を貸してくれた。おまえの友だちと私はすばらしい同盟を結んでいた。おまえの情報はこのポケットに入ってるんだ」
（丘沢静也訳『判決』、光文社古典新訳文庫版『変身／掟の前で 他２編』、2007、p. 26）

⑪
「そのまま動かずにおるがいい。お前の助けなど要らんわ！ お前のつもりでは、ここまで近づいてくる力はあるが、来るのがいやだからそこから動かないというのだろうが、思い違いでなければいいがな！ 相変わらず、儂のほうがずっと強いのだぞ。儂一人だったら、負けたかも知れん。だが、儂には母さんが力を貸してくれた。お前の友だちとの仲も最高だ。お前の顧客リストは、このポケットに入っておる」
（柴田翔訳『判決』、ちくま文庫版『カフカ・セレクションⅡ 運動／拘束』、2008、p. 145）

2.2.『流刑地にて』

2.2.1. 原文

„ (...) - Das ist mein Plan; wollen Sie mir zu seiner Ausführung helfen? Aber

natürlich wollen Sie, mehr als das, Sie müssen.“ (*In der Strafkolonie*, S. 234-235)

2.2.2. 英語訳

“- That is my plan; will you help me to carry it out? But of course you are willing, what is more, you must.” (*In the Penal Colony*, p. 159)

2.2.3. 日本語訳

①

「(……) ——これが、自分の腹案です。さだめし自分に加勢して、これを成就させて下さるでしょうね。いや、むろん、加勢して下さる心組にちがいありません。心組どころか、それこそ、あなたにとつても、義務なのです。」

(谷友幸訳『流刑地にて』、旧新潮社版『カフカ全集Ⅲ』、1953、174)

②

「(……) ——これが私の計画です。この計画の実行で私をお助け下さいますか。でも、むろんお助け下さるものと思います。それどころか、あなたはそうしなければならないのです」

(原田義人訳『流刑地で』、筑摩書房版『世界文学大系 58 カフカ』1960、385)

③

「(……) ——これがわたしの計画です。それを実行するのを、助けてくださいましょうか？　もちろんくださるおつもりでしょう。いや、それどころか、くださらねばならないのです」

(辻訳『流刑地にて』、『世界の文学 39　カフカ』、中央公論社、1966、460)

④

「(……) これがわたしの計画です。これを実行させるために、どうかわたしに援助の手を差し向けてくださいませんでしょうか。むろん、あなたはそうしてくださるはずです。それどころか、そうしなければならないのです」(川崎芳隆・浦山光之訳『流刑地にて』、旺文社文庫版『変身　他四編』、旺文社、1973、149)

⑤
「(……) ——これが私の計画です。この計画の実行のために私を助けてくださるでしょうか。むろんのこと助けてくださるでしょう。それどころか、あなたはそうしなければならないのです」
(柏原兵三訳『流刑地にて』、集英社版『世界文学全集 74　カフカ　ヴァルザー』、集英社、1979、255)

⑥
「(……) これが自分の計画です、その実行を支援してくださいますか？いや、もちろんあなたはそうなさりたいご心境でしょう、それどころか、支援せずにいられないご心境なのでしょう。」(円子修平訳『流刑地にて』、新潮社版『カフカ全集 1 』1980、151)

⑦
「(……) ——わたくしを助けていただけますね？ いや、助けないではいられない、そうなのではありませんか？」(池内紀訳『流刑地にて』、白水社版『カフカ小説全集④ 変身ほか』、2001、185)

⑧
「(……) 以上が、私の計画です。その実行に、貴方の手をお貸し頂けるでしょうか？ もちろん、ご協力頂けますね。いや、何が何でも、ご協力頂かなくてはならないのです」(柴田翔訳『流刑地にて』、ちくま文庫版『カフカ・セレクションII 運動／拘束』、2008、189)

2.3.『失踪者（アメリカ)』

2.3.1. 原文

„Also Leuten, die Dich zum Narren halten, glaubst Du, und Leuten, die es mit Dir gut meinen, glaubst Du nicht."
„Aber ich muß doch wissen, wie mir ist", fuhr Robinson auf, kehrte aber gleich wieder zum Weinen zurück.
„Du weißt eben nicht, was Dir fehlt, Du solltest irgend eine ordentliche Arbeit für Dich suchen, statt hier den Diener des Delamarche zu machen. Denn soweit ich nach Deinen Erzähungen und nach dem, was ich selbst gesehen habe, urteilen kann, ist das hier kein Dienst, sondern eine Sklaverei. Das kann kein Mensch ertragen, das glaube ich Dir. Du aber denkst, weil Du der Freund

des Delamarche bist, darfst Du ihn nicht verlassen. Das ist falsch, wenn er nicht einsieht, was für ein elendes Leben Du führst, so hast Du ihm gegenüber nicht die geringsten Verpflichtungen mehr." (S. 313-314)

2.3.2 英語訳

'So you believe anyone who makes a fool of you, and you won't believe anyone who means well by you.'

'But I must surely know how I feel,' exclaimed Robinson indignantly, beginning to cry again almost at once.

'You don't know what's really wrong with you; you should only find some decent work for yourself, instead of being Delamarche's servant. So far as I can tell from from your account of it and from what I have seen myself, this isn't service here, it's slavary. Nobody could endure it; I believe you there. But because you're Delamarche's friend you think you can't leave him. That's nonsense; if he doesn't see what a wretched life you're leading, you can't have the slightest obligation to him.' (America, p. 219)

2.3.3. 日本語訳

①

「ではあんたは、あんたを阿呆だと思つている人たちの言うことは信用し、あんたに好意をもつている人たちの言うことは信用しないんですね」

「だけどもわしは、自分がどんな具合なのか知らなくちやならないんだよ」とロビンソンは激昂した。しかし直ぐにまた泣きはじめるのだつた。

「あんたは全く、自分のどこが悪いのか分らないんですよ。あんたは自分の、何か正式の仕事をさがしたらよかつたんですよ。こんなところでドラマルシュの召使なんかにならないで。僕があんたの話やまた自分の見たところで判断したところでは、ここであなたのやつてることは雇用関係ではなくて奴隷関係ですよ。そんなことは誰だつて耐えられません、それは仰しゃる通りですよ。あんたはしかしドラマルシュの友達だから、彼を見すててはならないと考えているけど、それは間違いですよ。彼があんたがどんなにみじめな生活をしているか解らないんなら、あんたは彼に対してもはや何の義務もありませんよ」

(原田義人・渡邊格司・石中象治訳『アメリカ』、旧新潮社版『カフカ全集Ⅱ 審判・アメリカ』、1953、p. 423)

②
「あんたはね、あんた自身をばかだと思ってる連中なんか信用してるくせに、あんたに好意をもってる人々の言うことは信じないんだね」
「おれだって、自分のからだのぐあいがどうかぐらい、知らなくちゃならんさ」
と、ロビンソンは腹立ちまぎれにどなったが、すぐまためそめそ泣きだした。
「あんたはね、自分のどこに悪いところがあるか、さっぱりわかっていないんだな。ここでドラマルシュなんかの召使になるのは止めちゃって、あんたは何かまともな仕事を見つけた方がよかったんだ。あんたの話を聞いたり、自分の目で見たりした範囲で判断するとね、ここのは普通の召使の身分じゃなくて、まるっきり奴隷（どれい）だよ。人間なら、だれだってそんなことは我慢できないな。あんただって、そうだろうと思うんだけどなぁ。――そりゃ、あんたはドラマルシュの友達だから、彼を見捨てちゃいけないと思っているらしいけど、そいつが間違いのもとさ。どんなにあんたが悲惨な毎日を過ごしてるか、そのくらいのことを見ぬける目が彼にないんだったら、あんたの方だって、彼に対してこれっぽっちの責任もないわけなんだ」」
（中井正文訳『アメリカ』、角川文庫、1972、336）

③
「それでは君は、君をなぶり者にしている連中の言うことを信じて、君に好意を持っている人たちの言うことを信じないわけですね」
「それでも、おれは、自分がどんなぐあいか嫌でも知らずにはおれないんだ」と、言って、ロビンソンは、いきりたったが、すぐまた泣き続けた。
「君は、自分でも、どこがぐあい悪いか、ほんとうはわかっていないのです。とにかく、ここでドラマルシェの召使を勤めたりしないで、自分に向いたまともな仕事をなにか探さないといけない。僕が君の話を聞き、また、僕自身、この眼で見たことから判断すると、ここのは、奉公ではなくて、奴隷です。だれも耐えられないのが当たりまえで、その点、僕は君の言うとおりだと思うね。君は、自分がドラマルシェと友だちだから、彼を置き去りにするわけにはゆかぬと、考えているけれども、それは大まちがいです。君がどんなにみじめな生活を送っているかということすらも、あの男が見抜かぬくらいなら、君は、あの男にたいしてなにひとつ義理立てする必要もないはずです」

（谷友幸訳『アメリカ』、『世界文学全集 66　カフカ』、講談社、1974、587-588）

④
「それじゃ、あんたのことをばかにしている人たちのいうことは信じるけど、あんたのことを心配している人のことは信じないんだね」
「でも、おれだって具合がどうなのかは知らなきゃならないんだぞ」と、ロビンソンはいきり立ってどなったが、すぐまた大声で泣き続けた。
「あんたはね、自分のどこがいけないのかそれが分っていないんだよ。ここでドラマルシュの召使いなんかしている代りに、何かちゃんとした仕事を自分のために探さなけりゃ。あんたの話や、ぼくが自分で見たことから察するに、ここのは仕事じゃなくて、奴隷奉公だよ。そんなことは誰だって我慢できないさ、あんたのいう通りだよ。でもあんたはドラマルシュが友だちだから、見捨てられないと考えてるんだろ。それが正しくないのさ。ドラマルシュが、あんたがどんなみじめな生活を送っているか認めないなら、彼に対してつめのあかほどの恩義を感じることだってないさ」（千野栄一訳『アメリカ』、新潮社版『カフカ全集４　アメリカ』、1981、183-4）

⑤
「きみをバカにした人の言ったことは信じて、ちゃんとした人間の言うことは信じないんだね」
「ほんとに自分がどうなのか、わからないんだ」
ロビンソンはまたもや泣きじゃくった。
「どうすればいいのかが、わかっていないんだ。ここでドラマルシュの用事なんかしていないで、ちゃんとした仕事を見つけなきゃあ。いま話を聞いたし、この目で見たんだ。だからはっきり言える、ここのは仕事じゃない、奴隷じゃないか。誰だって我慢できない。自分はドラマルシュの友人だから、友人を捨てられないと思っているんだろう。でも、それはまちがっている。きみがどんなにみじめな生活をしているか、あいつはまるでわかっちゃいないんだから、ちっとも義務なんか感じることはないんだ」
（池内紀訳『失踪者』、白水社版『カフカ小説全集１』、2000、p. 251）

2.4.『訴訟（審判）』

2.4.1. 原文

„Und Sie wollen nicht befreit werden", schrie K. und legte die Hand auf die Schulter des Studenten, der mit den Zähnen nach ihr schnappte. „Nein", rief die Frau und wehrte K. mit beiden Händen ab, „nein, nein nur das nicht, woran denken Sie denn! Das wäre mein Verderben. Lassen Sie ihn doch, o bitte, lassen Sie ihn doch. Er führt ja nur den Befehl des Untersuchungsrichters aus und trägt mich zu ihm." (S. 86)

2.4.2. 英語訳

"And you don't want to be set free," cried K., laying his hand on the shoulder of the student, who snapped at it with his teeth. "No," cried the woman, pushing K. away with both hands. "No, no, you mustn't do that, what are you thinking of? It would be the ruin of me. Let him alone, oh, please let him alone! He's only obeying the orders of the Examining Magistrate and carrying me to him."
(The Trial, Vintage Books Edition, 1969, 72-73)

2.4.3. 日本語訳

①
「で君は、放されたくないんだろう！」と、Kは叫び、片手を学生の肩にかけたが、学生は歯でぱくりと食いつこうとした。
「いけないわ！」と、女は喚き、Kの両手を払い除けた。「いけない、いけないわ、そんなことしないで、何ということなさるの！　そんなことしたら私の身の破滅よ。放してあげて、ねえ、放してあげて。この人はほんとうにただ予審判事さんの命令どおりにやつているんで、私を判事さんのところを連れて行くのよ。」
（原田義人・渡邊格司・石中象治訳『審判』、旧新潮社版『審判・アメリカ』、1953、56）

②
「離れたくないんだろう！」とKは怒鳴ると学生の肩に手をかけ、学生は歯を剥き出して手に噛みつこうとした。「いけません！」女はわめき、両手でKを払いのけた、「ほんとになんてことをなさるの！　ね、お願いですからこの人を離してあげて。あたしのためを思って下さるなら、どうぞ離してあげて。この人は、判事さんの命令であたしを連れて行くん

です。この人に責任はありませんわ。」（本野亨一訳『審判』、角川文庫、1953、65）

③
「そしてあなたは、放してもらいたがってはいないんだ！」とKは叫んで学生の肩に手をかけたが、学生はその手にぱくっと歯で食いついてきた。
「やめて！」と女は叫んで、両手でKを押しのけた。「やめて、やめて。それだけはしないで。ほんとに何てことをお考えになるの！　そんなことをしたら、私はもうおしまいよ。放してあげて、ねえ、お願いよ、放してあげてったら。だってこの人は予審判事さんの言いつけに従っているだけなのよ、私を判事さんのところへ運んで行くんだわ」
（辻訳『審判』、筑摩書房版『世界文学大系 58　カフカ』、1960、37）

④
「あなたのほうでもはなされたくないと思っているんでしょう！」Kはそう言いながら学生の肩に手をかけた。学生は歯でかみつこうとした。
「いけません！」女は言って、両手でKをおしとどめた、「いけません、いけません、それだけはおやめになって。どうしようというんです。そんなことしたらわたしがだめになってしまいます。さあ、後生（ごしょう）ですから、その手をおはなしになって！　このひとは予審判事さんの命令でわたしを連れていくのです。」
（飯吉光夫訳『審判』、『ドイツの文学　7　カフカ』、三修社、1966、114）

⑤
「それでもきみも放されたくないんだ！」と、Kはさけんで、学生の肩に手をかけたが、その手に学生が歯でぱくっとかみついた。
「やめて！」と、女がさけんで、両手でKを払いのけた。「やめて、やめてよ、それだけはよして。つまらない考えを起こさないでよ。そんなことしたら、あたしが破滅しちゃうじゃないの。この人を放して、ね、お願いだから、放して。この人はただ予審判事さんの命令どおりにあたしを連れてくだけなのよ」
（立川洋三訳『審判』、集英社版『世界文学全集 74　カフカ　ヴァルザー』、集英社、1979、51）

⑥
「そしてあなたも放されたがっていないんだ！」、とKが叫んで、大学生の肩に手をかけると、その手に彼はいきなり噛みついてきた。
「やめて！」、と女は叫んで、Kを両手で押しのけた、「やめて、やめて、それだけはやめてよ、一体何を考えてるの！そんなことをしたら、わたしが破滅しちゃう！　放してやって、おねがい、彼を放してやって！この人は予審判事の命令に従ってるだけ、わたしを判事のとこへ連れていくだけなのよ。」
（中野孝次訳『審判』、新潮社版『決定版カフカ全集５　審判』、1981、54）

⑦
「自分だってはなされたくないのだ」
と、Kは叫んで学生の肩に手をかけた。学生は歯をむき出して噛みつこうとした。
「やめて」
女は声を上げ、両手でおしとどめるしぐさをした。
「どうか、どうか、そんなことはしないで。とんでもない！　わたしが大変なことになる。手をはなして。この人をはなして。判事の命令なの、わたしを連れにきた」
（池内紀訳『審判』、白水社版『カフカ小説全集②　審判』、2001、78）

⑧
「自分だって放されようとしないじゃないか」と叫んで、Kが学生の肩に手をかけると、学生がその手に噛みついた。「やめて」と叫んで、女は両手でKを押しのけた。「やめて、やめてよ、そんなこと。なに考えてるのよ！　あたし、終わっちゃうじゃないのよ。この人に構わないで。お願い。この人に構わないで。予審判事に言われたこと、やってるだけなんだから。あたしを判事のところへ連れてくの」
（丘沢静也訳『訴訟』、光文社、光文社古典新訳文庫、2009、96）

［参考］
洗濯女　（学生の肩ごしに手を出して学生の顔をなでながら、Kにむかって）どうしようもないってことが、よくおわかりでしょう。このちっぽけな厭らしい人がわたしを放さないのよ。
K　（二人のあとを追って走りながら）しかもあんたは放されたくないん

だろう！

学生は、女をはこびながら、階段を登って行く。

洗濯女　だめ！ だめ！ そんなことしないで！ いったい何を考えているの？ そんなことしたら、わたしの破滅よ、あなたも破滅よ。放してあげて、ねえ、おねがい。この人はただ予審判事さんの命令どおりをやっているだけで、わたしを判事さんのとこへ連れて行くのよ。

（白井健三郎訳『審判』、カフカ原作『戯曲 審判・城』（ブロート・ジイド・バロオ脚色、塚越敏・白井健三郎訳）、人文書院、1973、50）

2.5. 『城』

2.5.1. 原文

„... Und wenn Du kein Nachtlager bekommst, willst Du dann etwa von mir verlangen, daß ich hier im warmen Zimmer schlafe während ich weiß, daß Du draußen in Nacht und Kälte umherirrst.“ K., der die ganze Zeit über, die Arme über der Brust gekreuzt, mit den Händen seinen Rücken schlug, um sich ein wenig zu erwärmen, sagte: „Dann bleibt nichts übrig, als anzunehmen, komm!“ (S. 150)

2.5.2. 英語訳

“... And if you don’t manage to find a roof for the night, do you really expect me to sleep here in my warm room while I know that you are wandering about out there in the dark and cold?” K., who had been trying to warm himself all this time by crossing his arms on his chest and striking his back with his hands, said: “Then there’s nothing left but to accept. Come along!”
(*The Castle*, Vintage Books Edition, 1974, p. 120)

2.5.3. 日本語訳

①

「.....で、もしあなたが寝場所をみつけることができなければ、あなたの方は寒い夜の中をさまよい歩いているつて分りきつてるのに、あたしにはここのあたたかい部屋に寝るように、とおつしやつてるようなものなんですわ」

Kはその間ずつと、少しはあたたまるようにと、両の腕を胸の上で組み、手で背中をたたいていたのだが、

「してみると、受ける以外に手はないね。おいで」

（辻・中野孝次・荻原芳昭訳『城』、旧新潮社版『カフカ全集 I　城』、

1953、109-110)

②
「……そうしてあなたがおやすみになる場所もなく、寒い夜道をさまよい歩いていらっしゃることを知っていて、あたしだけこの暖い部屋にやすんでいられるとお思いになって？」フリーダの話しているあいだ、ずっと両腕を肩へまわし、すこしでも身体をあたためるため、手で背を叩いていたKはそのとき言った、「では結局引受けるほかないことになるね。よし、それじゃ行こう！」
（岡村弘訳『城』、『現代ドイツ文学全集　第13巻　ヴィーヒェルト　カフカ編』、河出書房、1953、185 - 186)

④
「……そして、もしあなたが寝場所を見つけることができなければ、あなたが夜の寒さのなかをさまよい歩いているのが、わたしにはわかっているのに、そのわたしには、ここのあたたかい部屋で寝ているように、とおっしゃってるようなものなんだわ」
　すこしあたたまるようにと、Kはそのあいだじゅうずっと、両腕を胸の上で組み、手で背中をたたいていたが、
「してみると、受ける以外に手はないね。おいで！」と言った。
（辻訳『城』、『世界の文学39　カフカ』、中央公論社、1966、119)

⑤
「……そして、もしあなたが寝場所を見つけることができなければ、あなたが夜の寒さのなかをさまよっているってわかっているのに、この暖かい部屋で自分だけで寝ていろ、とわたしに求めようとしているようなものよ」
　少しばかりあたたまろうとして、そのあいだじゅう両腕を胸の上で組み、手で背中をたたいていたKは、いった。
「それじゃあ、承知するよりほか手はないわけだ。おいで」
（原田義人訳『城』、筑摩書房『世界文学大系58　カフカ』、1969、194)

⑥
「……そうなって、あなたは、全く寝所に有りつけなくなっても、わたしには、たぶん、ここの暖かい部屋で眠れと、要求なさるお心算でしょう。でも、あなたが夜の寒気のなかを当て所（ど）なくさまよい歩いて

おられるのが分っていながら、どうしてわたしひとりが安眠を貪（むさぼ）っていられましょう」Kは、先刻からずっと、胸のうえに腕組みしたままで、すこしでもからだを暖めるために、両の手のひらで背中をたたきながら、聞いていたが、ついに折れて、「それじゃ、引き受けるよりほかないな。さあ、行こう」
（谷友幸訳『城』、『世界文学全集 66　カフカ』、講談社、1974、115）

⑦
「……こんなふうにご自分には泊まる宿がないのに、あたしにはこの暖かい部屋でぬくぬくと眠れっておっしゃるの？ あなたが寒い夜空の下をほっつき歩いているとわかっているあたしによ」
　Kは、この間ずっと胸の上で腕を組みあわせ、少しでもからだを暖めようとして、手で背中をたたいていたが、
「そうだとすると、受けるより仕方がないね。さあ、行こう！」
（立山洋三訳『城』、『世界文学全集 33』、学習研究社、1977、196）

⑧
「……それに、あなたは泊るところがなくても、わたしにはこのあたたかい部屋で眠れとおっしゃるのでしょう。あなたが夜の寒気のなかをほっつき歩いていらっしゃるとわかっていながら、どうしてわたしだけがぬくぬくと眠っていられるかしら」
　さきほどからずっと腕ぐみをして、すこしでもあたたまろうとして手で背中のほうをたたいていたKは、「じゃ、引受けるしか手がないな。さあ、おいで！」
（前田敬作訳『城』、新潮社『決定版カフカ全集 6　城』、1981、p.107）

⑨
「あなたに寝る場所がないというのに、わたしにはここで寝ろというの。あなたが夜と寒さのなかで往き迷っているというのに、どうして暖かい部屋に寝ていられるの」
　この間、Kはわが胸を抱くように腕を交叉させ、少しでも寒さをまぎらわすために、うしろにまわした手で自分の背中をたたいていたが、つづいて言った。
「ほかに手がない。よし、受けるとしよう！」
（池内紀訳『城』、白水社版『カフカ小説全集③　城』、2001、149）

使用資料

Franz, K. (2002). *Drucke zu Lebzeiten*. Herausgegeben von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag.

Franz, K. (2002). *Der Verschollene (Amerika)*. Herausgegen von Jost Schillemeit, Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag.

Franz, K. (2002). *Der Proceß*. Herausgegeben von Malcom Pasley, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag.

Franz, K. (2002). *Das Schloß*. Herausgegeben von Malcom Pasley, Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag.

（英語訳）

Kafka, F. (1976). *America*. Translated by Willa and Edwin Muir, with an introduction by Edwin Muir and a postscript by Max Brod. Harmondsworth: Penguin.

Kafka, F. (1969). *The Trial*. Definitive Edition. Translated by Willa and Edwin Muir. Revised, and with additional materials translated by E. M. Butler. New York: Vintage Books.

Kafka, F. (1974). *The Castle*. Definitive Edition. Translated by Willa and Edwin Muir with additional materials translated by Eithne Wilkins and Ernst Kaiser, and an homage by Thomas Mann. New York: Vintage Books.

Kafka, F. (1988). N. N. Glatzer (ed.): *The Collected Short Stories of Franz Kafka*. Harmondsworth: Penguin.

「お見通し」発言関連文献

西嶋 義憲 (2004):「『お見通し』発言による対話展開の原理 —カフカの対話断片テクストを例にして—」. In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』, 8, 155-168.

Nishijima, Y. (2005): „Durchschauende Äußerung im Dialog von Kafkas Werken“. In: 『文体論研究』, 51, 13-24.

西嶋 義憲 (2008): 「カフカのテクスト『流刑地にて』における『お見通し』発言 —『判決』との構造的類似性の分析—」. In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』, 12, 77-100.

西嶋 義憲 (2009a): 「カフカのテクスト『城』における『お見通し』発言」. In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』, 13,

23-43.
西嶋 義憲 (2009b) :「カフカの長編『訴訟』(*Der Proceß*)における「お見通し」発言 —登場人物間における優位性の明示手段の分析—」. In: 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』, 42, 39-49.
西嶋 義憲 (2009c) :「カフカのテクスト『失踪者』(*Der Verschollene*)における「お見通し」発言 —その共感的機能をめぐって—」. In:『かいろす』, 47, 49-63.
西嶋 義憲 (2010) :「カフカと『お見通し』発言 —作品内対話におけるその機能—」. In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』, 14, 53-73.
西嶋 義憲 (2011) :「『お見通し』発言のレトリック —カフカの長編三作の分析—」. In: 『文体論研究』, 57, 印刷中.